

令和5年10月26日（木）

埼玉県戸田市



市章

■市の概要

人口 141,887人（令和5年1月1日現在）
世帯数 68,332世帯（令和5年1月1日現在）
面積 18.19km²
予算 826億円（令和5年度当初予算）

戸田市は北にさいたま市南区、東に蕨市と川口市、西に朝霞市と和光市、南に東京都板橋区、荒川を隔てて北区と接している。「埼玉都民」と言われる言葉があるように、埼玉県から東京都へ通勤・通学を行う人は多く、中でも戸田市はJR埼京線が走っており、東京方面では池袋、新宿、渋谷まで乗り換えなしでアクセスできる交通の便が良い都市である。

また、戸田市により1993年に制定されたハーモナイズド・マークは、『交流・発展していく戸田市の未来像、ふれあう人々のあたたかさやエネルギー、豊かに流れる荒川、あふれる自然と緑などをイメージ』して作成されたもので、市の刊行物や広報PRにおいて利用されている。

戸田市の人口は141,887人、うち0-14歳の年少人口は19,779人、15-64歳の生産年齢人口は98,490人で、65歳以上の高齢者人口は23,618人となっている。

市内の市立学校は小学校が12校、中学校が6校。

戸田市の教育委員会は今年4月のForbes JAPANが選ぶ「30の教育アワード」にも選定され、その先進的な教育改革が全国から注目を集めている。



戸田市役所

1. 視察内容

(1) 特別支援教育・不登校児童生徒サポートについて

○戸田市特別支援教育推進計画

多様性を尊重し、全ての子供たちが力を発揮できるような誰一人取り残されない学びの保障を目標とする。

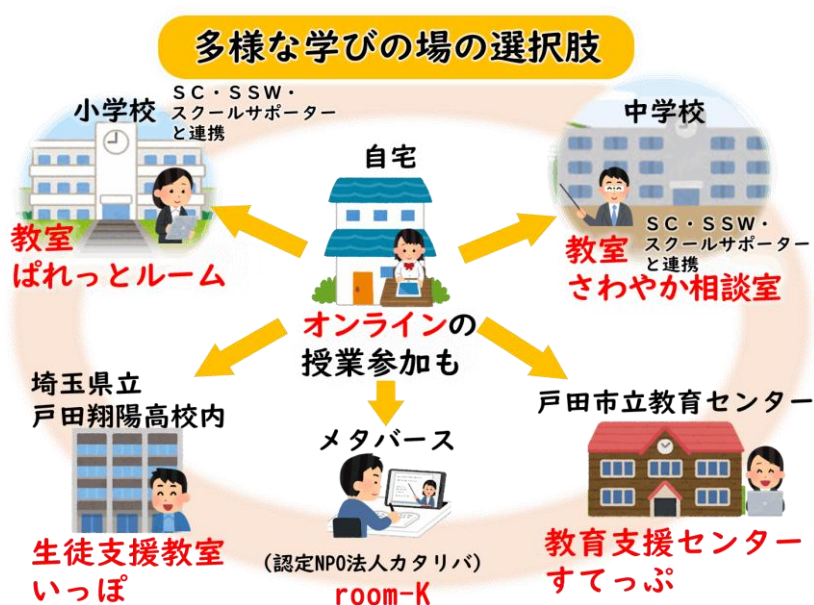
→「取り残さない」という行政目線ではなく、「取り残されない」との言葉を使い、生徒の立場から見た視点において、取り残されることのない学びを提供することを目指すものである。

○不登校児童を支援する総合的な構想「戸田型オルタナティブ・プラン」

→小さなサインを「科学の視点」で見つけ出す。「未然防止」「早期発見・早期対応」「適切な支援」の各場面において活用する。

実践例

- ・教育センター内に「すてっぷ」の設置
- ・戸田型校内サポートルーム「ぱれっとルーム」の設置
- 自身の状況に合わせたゆるやかな学びで「心の充電をする場所」
- ・県立戸田翔陽高校内生徒支援教室「いっぽ」の設置
- 高校内に設置し、生徒が高校に通学するようになることで、高校での学びを具体的にイメージすることにもつながり、実際に同高校に進学した生徒もいる。
- ・認定NPO法人カタリバとの連携によるメタバースを活用した学習支援「room-K」
- ・不登校対策ラボラトリー「ぱれっとラボ」設置事業
- ・社会に開かれたネットワーク構築事業(シンポジウム)



(2) 学校 ICT 教育の取組及び教育改革について

○フェイクニュースを見抜くデジタルリテラシー教育

○産官学との連携による戸田市 SEEP (Subject、EBPM、EdTech、PBL) プロジェクト
→大学や企業による産官学連携のプログラムを実施。産学当事者にとっては研究にもなることから Win-Win の関係で多方面からの協力を得ている。

実践例

・「セサミストリートカリキュラム」によるセサミワークショップでキャリア開発・多様性教育の実施

・Intel 株式会社の協力により、3Dプリンターやプロ用動画撮影ソフトを使用できるラボを開設

○EdTech (教育×テクノロジー)

→テクノロジー活用による新たな学びの創造、戸田市版 SAMR モデル*に基づく ICT の文具化=文房具のようにしてパソコンや電子ツールを使いこなせるようになることを目指す。

*SAMR モデル=

Substitution (代替)、

Augmentation (増強)、

Modification (変革)、

Redefinition (再定義)の頭文字



実践例

・プログラミング教育を小中一貫のカリキュラムで全校において実施

・全小中学校に ICT 支援員を配置、プロジェクト型電子黒板の使用

・全小中学校が「学習者用デジタル教科書実証事業」に参加

・株式会社 LoiLo 「ロイロノート」の活用及びオンライン研修の実施

○EBPM の方針

=Evidence-Based (経験に基づいた) Policy (方針) Making (形成)の頭文字

→経験等の個人の教員により異なる暗黙知のような、流動的で属人的な感覚に頼る教育から脱却し、エビデンスに基づく効果的・効率的な教育によって、どの学校においても一律同水準の学習が実施されることを保障しようというもの。

実践例

- ・全国に先駆けた「戸田市教育政策シンクタンク」の設置
- ・大学教授や弁護士等の有識者で構成される諮問会議 アドバイザリーボードを開催、外部との共同研究を実施(例: 国立情報学研究所と連携したリーディングスキル教育等)

2. 所感

・熱意ある戸ヶ崎教育委員会委員長と職員の方々に、戸田市の教育を新しいキャンパスに絵を描くようにして築き上げてきたこれまでの取り組みの変遷を教えていただき、貴重な視察となった。

・不登校の児童生徒支援においては、子どもの目線に立ったいろいろな選択肢を用意しておくことが非常に重要であり、ICTの活用においては、同じ学習指導要領をもとにしているにもかかわらず、これほどまでに学びを「幅広く」「深く」掘り下げることができている自治体があることに驚き、「杉並区においても戸田市の取り組みを参考にし、教育を進化させていくべき」と感じた。

・校内サポートルーム「ばれっとルーム」は、大人の価値観を押し付けることなく、自身の状況に合わせたゆるやかな学びを行うことができ、「心の充電をする場所」と捉えて見守っていることが印象的であった。

一度、落ち込んでしまった心を充電できること、そのためには、ゆるやかで自主的な学びが寛容に許容され、そのための場所が学校内に提供されることが大事であるとの話があった。そうなれば自ずと「もっと勉強したい」というところまで気持ちが戻る日がやってくる、との考えには大変共感した。

・経験則のような、個人の教員により異なる、流動的で属人的な感覚に頼る教育から脱却し、エビデンスに基づく学校運営を行うための一環として、出席状況などの「データ」から、不登校に陥る前に生徒の状況を把握しようという研究を進めているとのお話があった。そうした部分にこそ、質的・量的問わず多数のデータを分析できるデジタルを活用することが有用であると感じた。

それによって、経験年数の違い等、教員によって気付きの力が異なることで生徒のSOSが見逃されてしまうことを防ぎ、生徒の傷が深くなる前に対処できる可能性が高まる。

不登校対策においては教員の力量に頼りきりにならないようにし、エビデンスベースを心がける「データによる分析」や「予防」の観点も取り入れるべきと感じた。

- ・マイクロソフトや Intel 株式会社の協力により、3Dプリンターやプロ用動画撮影ソ

フトを使用できるラボを開設しているとのことで、子どもたちの学びに制約をかけない環境が揃っていることに感心した。

産官学の協力によるプロジェクトも、教育委員長や職員の方が、自発的に市役所の外に出ていき、自らその実現のための交渉にあたったとのことで、「子どもたちのために」という熱い思いがひしひしと感じられ、学校の外にも行くべき場所、やるべきことがあるということは、杉並区の教育委員会や教育関係者も参考にすべきであると感じた。

子どもたちが「学びたい」と思ったことを空振りに終わらせず、それにしっかりと対応する「学習意欲に応える教育環境づくり」に、学校において中心となる存在は「教える側の教員」ではなく「学ぶ側の児童・生徒」である、という学校のあるべき姿を見出し、理想的な教育環境、学習環境を整えていることに感銘を受けた。

上記の工夫で、戸田市は予算や人事配置を言い訳にせず、自らのアイディアによって学校現場を充実させており、杉並区もこのような取り組みを参考にすべきである。

